中国語を母語とする日本語上級学習者の割り込み発話に関する一考察

―相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較―

陳　新

A Study on Interruption in a Conversation by Chinese Learners of Advanced Japanese:

Comparison of Third-party and Partner Language Contact Situations

Chen Xin

在日常谈话中，有时候会发生插入对方谈话的现象。一般情况下，插话被认为是打断对方谈话的一种不礼貌行为，但近年来有关研究表明恰当的插话是一种积极参与对方谈话，促进谈话顺利开展的一种言语行为。本稿作为阐明日语学习者插话现象的基础研究，从使用频率及对对方谈话所产生的影响两方面，调查了日语会话中中国学习者有关插话的使用情况。具体以 5 名高级日语学习者（以下为“CNNS”）为研究对象，设定了两个场面：一个是 CNNS 与日本友人为对象的对方言语接触场面（以下为“对方言语场面”）；另一个是 CNNS 与非日语母语者（统一为友人关系的韩国留学生）为对象的第三言语接触场面（以下为“第三言语场面”）。

调查结果如下：首先，无论对方是不是日语母语者，CNNS 的插话行为未必都是打断对方谈话的负面影响，更多时候 CNNS 的插话行为是对对方谈话的一种补充或认同，推动了双方谈话的顺利开展。另外，谈话对象为韩国留学生时，CNNS 的插话频率明显高于与日本友人进行交谈的场面。同时，当谈话对象为日语母语者时，CNNS 会有意识避免插话过多使用，特别是表示在反对意见或者提出新话题时；但当谈话对方是非日语母语者时，CNNS 此方面的意识变弱，而更注重积极参与对方的谈话，积极表达自己的观点。因此，这些使用倾向反应了：「谈话对象是不是日语母语者」这一「语言外部因素」会对日语学习者日语使用产生一定的影响。

关键词：插话，对方言语接触场面，第三言语接触场面，中国学习者

１．はじめに

会話は複数の人々によって、話者の交替を繰り返しながら進められていく。しかし、私たちは全く無秩序に話す順番（tune）を交替しているわけではない。円滑な話者交替はターン移行の適切な場（transition relevance place：TRP）において行われる。日本語では、話者交替は話し手がポーズ（pause）を置いた部分で起こることが多い。しかしながら、会話の中で、一人の話者が話している途中でもう一人の話者が発話を開始し、二人の発話が重なっていることがしばしば見られる。このような発話は、割り込み発話と呼ばれ、日本語母語話者の会話においては、一見会話を妨害する支配的な行動のように見えるが、相手と調和して会話を作り上げる効果もあるとされる（荻原2002、劉2011など）。一方、日本語学習者の割り込み発話は、会話の円滑な進行を妨害するなど、否定的に捉えられるものが多いと指摘されてきた（木暮2002、劉2012など）。そして、これらの接触場面に関する研究は、母語話者の言語行動との違いに注目したものがほとんどで、その場面における言語問題は、学習者の言語能力の不足を理由として結論付けたもの（長谷川2005、劉2012など）が多い。しかし、ますます多様化、かつ複雑化している異文化接触場面に着目すると、学習者の言語習得に与える要因は言語内的要因だけではなく、話し相手が母語話者か非母語話者か、すなわち、「話し相手の母語」という言語外的要因が及ぼす影響は少なくないという報告もある（陳、川口2012；赤羽2014）。

そこで、本稿では、日本語母語話者との相手言語接触場面に加え、非母語話者同士の第三者言語接触場面[1]を設定し、対話者が日本語母語話者であるかそうでないかという違いが日本語学習者の割り込み発話の使用にどのように影響するかを明らかにすることを目的とする。具体的には中国語を母語とする上級学習者（CNNS）５名を対象とし、それぞ

れの会話場面に「対友人」場面を設定して、CNNSが会話相手に応じて、どのように割り込み発話を行うかを考察することにする。分析したのは、この５名の中国人上級学習者による友人関係の日本人及び韓国人上級学習者との２場面10組の会話データである。

２．先行研究と研究課題

２．１　先行研究のまとめ

割り込み発話に関する研究は、母語場面及び日本語母語話者と非母語話者との接触場面を扱ったものである。

母語場面における割り込み発話の研究には、開始位置、発話内容、発話権の移動の有無から割り込み発話を分類した藤井（1995）、日本語インタビューにおける「言いさし－割り込み」の連鎖を観察した荻原（2002）、先行発話に対する次の発話の開始位置と内容の関係から、割り込み発話の機能を考察した劉（2011）などがある。荻原（2002）では、「言いさし－割り込み」の連鎖という視点から割り込み発話の機能を観察し、割り込み発話は力関係を示した攻撃的行為というより、会話を盛り上げたり、強調したり、不明瞭さを無くしたりすることで、会話参加者の役割としてより充実した会話をつくりあげようとする働きをしていると指摘している。劉（2011）では、日本語母語場面では補足的あるいはコメント的な割り込み発話が多く、話者が相手と共同で意見を構築する傾向があると指摘された。以上の研究より、日本語母語話者場面において、割り込み発話が必ずしも相手の発話権を取る支配的な行為ではな

1　接触場面について、ファン（2006）は、「接触場面で実際に使われる言語（つまり、接触言語）と参加者の使用言語との関係によって、相手言語接触場面、第三者言語接触場面、共通言語接触場面の３つの場面に分類」（p.127）できると述べている。相手言語接触場面は、参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを取る場面である。第三者言語接触場面は、参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面である。

く、会話に対する関心度の表出、相手への共感を示す協調的な側面を多く持っていることが明らかにされた。さらに予測による割り込み発話を、会話への熱心な関わりを示す、共話の一形態として捉えられている。

一方、接触場面における学習者の割り込み発話を扱ったものには、木暮（2002）、長谷川（2005）、劉（2012）などがある。木暮（2002）では、上級学習者でも、自己の発話を優先させるための妨害的な割り込み発話が多く、先行発話に対する同意・共感、関心、理解などを表す調和系の割り込み割り込みは全く見られなかったと解明された。長谷川（2005）は、学習者の割り込み発話については、先行話者のターンを支持するための調和系はほとんどなく、マイナスと捉えられる独立系が多かったと指摘し、木暮（2002）と同様の結果を示している。そして、日本語学習者の割り込み発話の原因には、意図的に割り込む「自己の発話の優先」、非意図的な割り込みである「シグナルの不認識」「TRPの誤認」があると指摘し、さらに、これは、日本語学習者の会話予測能力不足が原因だったと述べている。また、劉（2012）は、日本語学習者の割り込み発話は相手の発話を補助するより、自分の発話を優先させるため、母語話者の割り込みに比べて不快に感じられやすいと指摘している。これらの研究から、日本語学習者の割り込み発話は、母語話者と比べ、先行話者の発話を妨害するなど、マイナスに捉えられるものが多いことが分かった。さらに、この言語問題は、学習者の言語能力の不足を理由に結論づけられることが多かった。

これまで、学習者が参加する接触場面の会話に焦点を当てた研究では、日本語母語話者との接触場面を対象としたものが中心であった。そして、「言語習得」が注目してきたのは、一般に日本語母語話者との接触場面において産出される日本語であった。しかし、グローバル化の急速な進展につれて、母語の異なる学習者同士が行うインターアクションは教室

内外でも頻繁に行われており、学習者の日本語使用場面は母語話者との接触場面に限られるわけではない。そして、筆者を含めた日本語学習者に耳を傾けると、「日本人と話すときは緊張する」「留学生同士で話すとリラックスして話せる」（ファン1999、赤羽2012）といった。だとすれば、「言語習得」を考えると、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は、看過できないのではないか。そこで、学習者の割り込み発話の全体像をより明らかにするために、本稿では、日本語母語話者との相手言語接触場面及び非母語話者同士の第三者言語接触という二つの場面を扱うこととした。

また、劉（2012）が述べたように、割り込み発話の特徴を考察する場合、会話の話題、参加者間の上下・親疎関係、性別などの要因を無視するわけにはいかない。これらの要因は割り込み発話の使用に複合的に関与している。しかし、以上の接触場面に関する調査は、それぞれ異なる会話状況で行われており、分析枠組みも異なる。例えば、会話参加者間の上下や親疎関係（劉2012）、または調査対象の性別や日本語能力（木暮2002、長谷川2005）も統一されていない。ある程度の数の会話データを収集し、実証的に論じようとする場合、関与する要素を可能な限り統制しなければ、明らかになった割り込み発話の様相の差がいかなる要因に由来するかは論じられない。そこで、本稿では、調査協力者の母語、社会関係、性別といった当該要素を統制した会話状況を設定することにした。

２．２　研究の立場と研究課題

以上を踏まえて、本稿では、相手言語接触場面と第三者言語接触場面におけるCNNSの割り込み発話という現象を研究対象とし、出現頻度

とその機能から、対話者が日本語母語話者であるか否かという要因がCNNSの割り込み発話の使用に与える影響を考察する。具体的な研究課題は以下の２点である。

① 相手言語接触場面と第三者言語場面における CNNS の割り込み発話の出現頻度はどうであろうか。

② 相手言語接触場面と第三者言語場面における CNNS の割り込み発話はどんな機能を果しているのか

３．調査概要と分析方法

３．１　調査対象及び調査方法

本稿では、中国語を母語とする上級学習者[2]（CNNS）５名を中心として、相手言語接触場面（以下「相手場面」）と第三者言語接触場面（以下「第三者場面」）におけるCNNSの割り込み発話の様相を把握する。そして、滝浦（2008）の「一般に、割り込み発話は人間関係が親である友人同士の間で起こりやすい」（p.178）という指摘に基づき、会話場面を「対友人」に設定した。また、会話参加者の社会的属性を統制するために、全データ協力者を大学に属する学部生と大学院生（20代の女性）とした。母語の要因を除くには、第三者場面におけるCNNSの会話相手を韓国語上級学習者に統一した。つまり、この５名の中国人上級学習者の、それぞれ友人関係の日本語母語話者（以下NS）と韓国人上級学習者（以下KNNS）との会話、合計10組の会話を収録した。話題は自由で日常生活で行われる会話と同じような世間話でよいと伝え、１組15～20分間ずつ会話してもらい、合計200分程の会話を収録した。会話の収

2 調査対象者CNNSと会話相手の日本語能力は滞日期間、学習歴、日本語能力試験のレベルによって判定した。上級と判断したのは、堀口（1997）と陳文敏（2004）を参考にし、（A）来日して１年以上であり、（B）日本語学習者時間数が800時間以上であること、（C）日常生活やゼミで自由に日本語を使っていること、の３点による。

録が全て終了した後、フォローアップインタビューを行った。表１にインフォーマント情報を、表２に会話情報を示す。

表１　インフォーマント情報

参加者	日本語能　力	出身地	母語	性別	年齢	滞日期間	日本語学習歴
CNNS1	**上級**	**中国**	**中国語**	**女**	**25**	**２年７ヶ月**	**５年６ヶ月**
CNNS2	**上級**	**中国**	**中国語**	**女**	**21**	**１年**	**３年２カ月**
CNNS3	**上級**	**中国**	**中国語**	**女**	**21**	**１年**	**３年２カ月**
CNNS4	**上級**	**中国**	**中国語**	**女**	**23**	**１年８カ月**	**５年２カ月**
CNNS5	**上級**	**中国**	**中国語**	**女**	**24**	**１年８カ月**	**５年２カ月**
NS1	母語話者	群馬県	日本語	女	23	—	—
NS2	母語話者	埼玉県	日本語	女	22	—	—
NS3	母語話者	千葉県	日本語	女	20	—	—
NS4	母語話者	埼玉県	日本語	女	21	—	—
NS5	母語話者	埼玉県	日本語	女	22	—	—
KNNS1	上級	韓国	韓国語	女	27	４年	６年６カ月
KNNS2	上級	韓国	韓国語	女	21	１年１カ月	７年
KNNS3	上級	韓国	韓国語	女	21	１年	４年
KNNS4	上級	韓国	韓国語	女	21	１年	４年

表２　会話情報

相手場面 「CNNS－NS」場面	第三者場面 「CNNS－KNNS」場面
相手場面① 「CNNS1－NS1」場面 2010年10月17日	第三者場面② 「CNNS1－KNNS1」場面 2010年10月20日
相手場面③ 「CNNS2－NS2」場面 2016年６月９日	第三者場面④ 「CNNS2－KNNS2」場面 2016年６月13日
相手場面⑤ 「CNNS3－NS3」場面 2016年６月６日	第三者場面⑥ 「CNNS3－KNNS3」場面 2016年６月15日
相手場面⑦ 「CNNS4－NS4」場面 2016年６月11日	第三者場面⑧ 「CNNS4－KNNS2」場面 2016年６月14日
相手場面⑨ 「CNNS5－NS5」場面 2016年６月15日	第三者場面⑩ 「CNNS5－KNNS4」場面 2016年６月15日

このようにして得られた10組の会話データをすべて「基本的文字化の原則BTSJ（改訂版）」（宇佐美2006）に従って文字化した。BTSJでは第１話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第２話者の発話が始まり、結果的に第１話者の発話が終了した場合は、「**【】**」をつけるとされている。

３．２　調査時期

この10組の会話の調査時期は表２にまとめている。会話①と会話②は2010年に、会話③～⑩は2016年に収録したデータである。

３．３　分析方法

本稿は、会話におけるCNNSの割り込み発話を対象に分析したもので

ある。割り込み発話とは、１人の話者のターンの途中で、他の話者が発話を開始することである（林2008）。その割り込み発話によって、先行話者の発話を途中で中止に追い込む場合もあり、割り込み話者と先行話者とともに発話を並行して産出する場合もある。

本稿では、分析対象とする割り込み発話は１人の話者の発話の途中で、他の話者が挿入する実質的な発話のみとする。また、先行話者の発話に挿入するあいづち的な発話は「持続する時間が短く、先行発話の産出にほぼ影響がないため」（劉2012、P.5）、分析対象としないことにした。

分析の手順として、まず、「相手場面」と「第三者場面」におけるCNNSの割り込み発話を取り上げて、割り込み発話と先行発話との関係によって割り込み発話の「機能」を考察する。次に、両場面における各機能の割り込み発話の出現頻度を比較する際に、具体的な会話例に基づき、両場面の差異がどんな要因に生起するのかを検討する。

４．調査結果及び考察

４．１　割り込み発話の機能

分析に入るに先だって、本稿における割り込み発話の機能について、その分類法を説明する。

劉（2012）によれば、割り込み発話の機能とは話者が割り込みによって達成しようとする言語行動のことである。日本語会話における割り込み発話の機能を分析したものには、藤井（1995）、木暮（2002）、長谷川（2005）、劉（2012）などがある。木暮（2002）、長谷川（2005）は藤井（1995）の「先行発話に対する割り込み発話の内容と発話権の移動」という枠組みに従い、割り込み発話の機能を「調和系」「調整系」「独立系」の３種類に分類する。「調和系」と「調整系」は先行話者の発話権が維持される割り込み発話として捉えられている。「独立系」は先行

話者の発話権が割り込み発話話者に移動する割り込み発話とされている。劉（2012）は、以上の分類を参考にし、更に、割り込み発話と先行話者との「フロア」[3]との関係を基準にして、割り込み発話の機能を大きく「フロア内での割り込み」と「新たなフロアを築く割り込み」に分類している。劉（2012）では、「フロア内での割り込み」は、割り込み話者が先行話者の発話の途中で、補足や短い感想などの割り込みによって、先行話者の発話を補助するものとして捉えられている。つまり、相手の発話権を取るわけではなく、相手への共感を示したり、先行話者とともに会話を構築したりして、相手の発話を促進する「協調的な割り込み」であると言える。一方、「新たなフロアを築く割り込み」は、割り込み話者が先行話者から発話権を取って、その後、常に割り込み発話を中心にして新しい発話権を築き始めるとされている。つまり、先行話者の発話権を奪い、相手の発話を妨害する「支配的な割り込み」であると言える。本稿では、劉（2012）を参考にし、割り込み発話の機能を大きく「協調的な割り込み」と「支配的な割り込み」に分類する。なお、それぞれの下位分類を荻原（2002）と劉（2012）を参考に以下のように設定している。具体的には、「協調的な割り込み」には、「情報付加・補足」「質問・確認」「共話作り」、「感情生起」、「話者助け」の５つがある。「支配的な割り込み」には「新情報提示」「反論」の２つがある。

４．２　両場面におけるCNNSの割り込み発話の出現頻度

まず、相手場面と第三者場面におけるCNNSの割り込み発話の全体的な出現頻度を表３と図１に示す。

---

3 「フロア」とは、林（2008）によれば、話者が持つ会話の主導権に関わる概念である（p.108）

表３　両場面におけるCNNSの割り込み発話

発話数（%）

	協調的な割り込み	支配的な割り込み	総数
「CNNS-NS」場面（相手場面）	21（91.3%）	2（8.7%）	23（100.0%）
「CNNS-KNNS」場面（第三者場面）	58（80.6%）	14（19.4%）	72（100.0%）

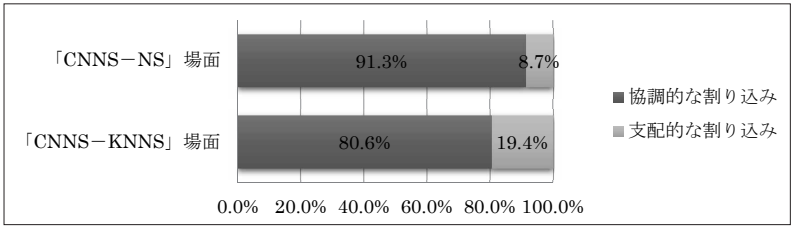

図１　両場面におけるCNNSの割り込み発話の機能別出現頻度

全体数をみると、表３に示したように、CNNSの割り込み発話は「CNNS－NS」場面では23話であるのに対し、「CNNS－KNNS」場面では72話であり、第三者場面でのCNNSの割り込み発話の数が相手場面の３倍以上であることが分かる。この結果から、CNNSは、第三者場面の方が相手場面より相手の発話に割り込む傾向が大きいことが窺える。割り込み発話の使用について、CNNSはインタビューで「割り込み発話は相手の発話を中断させることがあるので、多用しすぎると、相手に不快感を与えるかもしれない。そこで、日本人と話すときは、その多用を控えようと意識するが、相手が留学生の場合は、そんな意識が薄れ、積極的な会話参加を優先する」と語っている。つまり、相手が日本語母語話者である場合より、相手が非母語話者である場合のほうが、割り込み発

話への配慮より、積極的な会話参加に意識が傾いていることが示唆される。

また、割込み発話を機能別に分けてみると、協調的か支配的かという面で、表３と図１に示したように、相手場面であれ、第三者場面であれ、相手の発話を妨害するような「支配的な割り込み」はさほど多くなく、「協調的な割り込み」が圧倒的に多いことが明らかになった。つまり、対友人の場合、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、CNNSの割り込み発話は「協調的な割り込み」のほうに集中していることが分かる。

以上の結果から、対友人の場合、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、CNNSによる割り込み発話は必ずしも発話権を取る妨害的なものではなく、会話の展開を促進する機能があることが分かる。

一方、これまでの接触場面に関する研究では、日本語学習者による割り込み発話について、「協調的な割り込み」がほとんど見られず、会話を妨害する「支配的な割り込み」が多く見られたと指摘されてきた（長谷川2005；劉2012）。つまり、今回の調査結果と反対的な結果を示している。この相違の要因は以下のように考えられる。

相手の発話への関心を示し、会話の進行を促す働きをしている「協調的な割り込み」は、劉（2012）では「相手と自分が共一成員性を有することを示すもの」（p.3）であるとされており、また、本田（2016）では、親しいものどうしの会話に特徴的にみられたものとして捉えられている。このことから、「協調的な割り込み」は親しい友人関係の会話のほうに現れやすいのではないかと考えられる。本稿の分析データはすべて友人関係の会話であるため、共感の強い、積極的に相手の発話に関与しようとする「協調的な割り込み」が多いと思われる。一方、日本語学習者の割り込み発話に関する先行研究は会話参加者間の親疎関係が統一されて

いないもの（劉2012）、または、人間関係が疎である初対面場面を分析したもの（長谷川2005）が多かった。これらの親疎関係の要因は割り込み発話の使用に影響を与える可能性は否めない。

以上を踏まえて、本稿では、日本語学習者による「協調的な割り込み」は先行研究より多く見られたことは、調査協力者の親疎関係などの会話状況の設定と関わっているのではないか。

また、表３に示した、両場面におけるCNNSの割り込み発話の機能別出現頻度を比較すると、「協調的な割り込み」は、第三者場面での発話数（58話）が相手場面（21話）の約３倍である。また、「支配的な割り込み」は、第三者場面での発話数（14話）が相手場面（２話）の約７倍である。つまり、「協調的な割り込み」であれ、「支配的な割り込み」であれ、第三者場面での発話数が相手場面より多く、両場面には大きな差があると言える。では、その両場面の差は何に起因するのだろうか。その要因を明らかにするために、以下、「協調的な割り込み」と「支配的な割り込み」の発話内容の分析を試みることにする。

４．３　両場面におけるCNNSの「協調的な割り込み」

まず、「協調的な割り込み」について観察する。

本稿では、荻原（2002）と劉（2012）の一部を参考し、「協調的な割り込み」を「①情報付加・補足」、「②質問・確認」、「③共話作り」、「④感情生起」、「⑤話者助け」の５つに分類した。その結果が表４と図２である。

表４　両場面におけるCNNSの「協調的な割り込み」（発話数）

	①情報付加・補足	②質問・確認	③共話作り	④感情生起	⑤話者助け	合計
「CNNS-NS」場面（相手場面）	9	4	2	3	3	21
「CNNS-KNNS」場面（第三者場面）	26	14	8	7	3	58

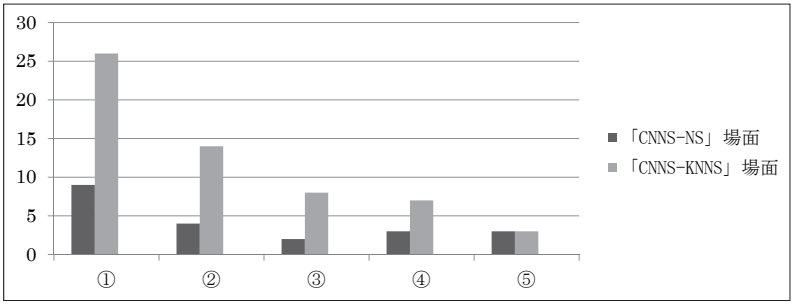

図２　両場面におけるCNNSの「協調的な割り込み」（発話数）

表４、図２を見ると、「①情報付加・補足」は、相手場面でも、第三者場面でも最も多く、CNNSの「協調的な割り込み」の約半分を占めていることが分かる。また、①～④のような「協調的な割り込み」はいずれも第三者場面のほうが相手場面の３倍近く起きることが分かる。特に、「③共話作り」の発話数は、相手場面と第三者場面で、それぞれ２話と８話で、第三者場面のほうが相手場面の４倍である。つまり、相手が日本語非母語話者である場合、①②③④のような協調的な割り込み発話より頻繁に生起することが分かる。以下に例文を出す。

①情報付加・補足

聞き手は話し手が文末まで言い終わる前に、内容を察知することができて、先行発話に関連する情報を付け加えて、相手の発話を補足するものである。

例１：(KNNS2の小学生時代の香港旅行に関する話題)

182　KNNS2：で、私、香港小学校の時以来、行ったことがないかな。

183　KNNS2：ちょっと、香港、小学校も、自然にやることが全然ない〈でしょう〉｛｛。

184　CNNS2：〈ない〉｝｝でしょう。

185　CNNS2：ショッピングしかない。

186　KNNS2：ショッピング【【。

187　CNNS2：】】そう、高級品ばかりで、(そう)、買えないじゃん。

188　KNNS2：なんか、食べ物（うん)、“チャーシュー”とか、それしかないし。

189　CNNS2：そうね。

この例文では、発話186が示したように、KNNS2は186で「ショッピング」について話そうとしたところで、CNNS2はその内容を察知し、KNNS2の発話を最後まで待たずに、187で「そう、高級品ばかりで、買えないじゃん」、割り込みの形で関連する情報や自分の意見を付け加えて積極的に会話に参加している姿勢が見られた。また、今回の調査データにある「情報付加・補足」のような割り込み発話は、例１の「そう、高級品ばかりで、買えないじゃん」が示したように、「そう」によって相手への同意と共感を表しながら、相手の発話内容に関連する情報を付け加えたりして相手の発話を補足することが多かった。つまり、相手の

発話権を取るというより、相手の発話に関する情報を補足して、積極的に会話に関与しようとするために、相手の発話に割り込みを行うのではないだろうか。

「①情報付加・補足」は、相手場面でも、第三者場面でも、CNNSの割り込み発話の中で数が最も多く、CNNSの「協調的な割り込み」の約半分を占めている。このことから、対友人の場合、会話相手が日本語母語話者であるかどうかにもかかわらず、CNNSは割り込み発話を用いて相手の発話に関連する情報を補足しながら、積極的に相手とともに会話を進めていこうという姿が見られた。

②質問・確認

話し手が話している途中で、聞き手は話題に関する自分の理解が正しいかどうか確かめるために、相手の発話に割り込む形で質問することである。「②質問・確認」は相手場面と第三者場面においては、それぞれ４話と14話である。

例２（中国の中学校の恋愛禁止について）

477　NS3：で、それはずっと言ってた、確かに学校も恋愛禁止みたいな。

478　CNNS3：あー。

479　NS3：中学校も【【。

480　CNNS3：】】それはあるんだ？日本には。

481　NS3：日本じゃない、中国、中国。

482　CNNS3：ああ、中国、そうなんだ。

483　NS3：中国の中学校は、その学校はまあ、男女の付き合いとか禁止で。

この例文では、NS3は477で「学校も恋愛禁止」について話しているが、どの国の学校なのかについてはっきり述べていないため、聞き手としてのCNNS3はNS3の479「中学校も」のところで割り込んで、「それはあるんだ？日本には」と質問して具体的な説明を求めている。NS3はこの質問に対して、「日本じゃない、中国」と答えている。さらに、その後、NS3は483でCNNS3の割り込みにより中断させた「中学校の恋愛禁止」の話題を続け始めた。つまり、NS3の発話はCNNS3の割り込み発話によって、一時的に中断されたが、その後同一内容の発話が再開され、当初計画していた発話目的は達成されたことが分かる。この流れから、CNNS3は相手の発話に割り込んだが、簡潔に質問を述べることによって、相手の全体の話のスムーズな流れを滞らせたり、相手の発言権を取ってしまうわけではないと言えよう。この割り込み発話は「分からないまま会話を持続させないという聞き手側の意識の現れ」（荻原2002、p.71）、すなわち、単に相手の発話内容を明確にさせるための手段と考えられる。このように、「質問・確認」の割り込み発話から、聞き手の話題への高い参加度合いが窺える。「②質問・確認」は相手場面と第三者場面においては、それぞれ４話と14話である。つまり、CNNSは、相手が日本語非母語話者の場合、わからないことがあれば、積極的に質問・確認し、聞き手の話題への参加度合いがさらに高いと言えよう。

③共話作り

話し手の話している途中で、聞き手はその発話の残りの部分を察知して、それを相手が言う前に先取りして、二人が共同で一つの発話を作りあげていく。このような割り込み発話は相手への協力を示しており、水谷（1995）に習い、「共話作り」という言葉を当てることにする。

例３（中国への旅行について）

191　KNNS2：で、まあ、中国へ行くとしたら、北京とか、西安とか、そういう、そっちは【【。

192－1　CNNS2：】】そうそう、そっち側のほうがもっと,,

193　KNNS2：〈見る〉｛｛。

192－2　CNNS2：〈見る〉｝｝ところが多いし。

194　CNNS2：浙江省もいいよ、来て。

中国の北京や西安は観光地として世界でも有名である。KNNS2は191で北京や西安と話し出したら、CNNS2はKNNS2の言おうとしたことを予測し、KNNS2の発話のターンの終了を待たずに、192－1と192－2で内容的には「そっち側のほうがもっと見るところが多いし」と発話を完結した。そして、KNNS2の193「見る」という発話はCNNS2の192－2の「見る」と重なった。このことから、192CNNSの割り込み発話（先取り発話に当たる）はKNNS2が言おうと思っていたことと一致している、ということが分かった。つまり、CNNS2とKNNS2は共同で共話を作り上げている。従って、例３のような先取り発話に当たる割り込みは、発話権を奪い合うというのではなく、会話参加者双方が協力して会話を進めようとしていると考えられる。また、ポライトネス理論から見れば、共話作りのための割り込み発話には「同一の出来事に関心を共有しているというポジティブポライトネスに相当する仲間意識が構築されている」（三牧2015：p.35）と言えよう。

「③共話作り」の発話数は、相手場面と第三者場面で、それぞれ２話と８話で、第三者場面のほうが相手場面の４倍である。相手が非母語話者である場合のほうが、相手が日本語母語話者より、CNNSは積極的に会話に参加したりして、相手とともに共話を作り上げようとする傾向が

大きいことが分かる。

④感情生起

例４のように、相手の発話内容に対する自分の感情や興味を表すために、聞き手が相手のターンの終了を待たずに発話を開始するという言語行動である。このような割り込み発話は相手場面と第三者場面においては、それぞれ３話と７話である。

例４（KNNS2の沖縄旅行について）

133　KNNS2：で、もともと、私はなんか、８月に、なんか、高校の友達と沖縄行く予定だったけど、なんか、それは何便がないことになっちゃって、結局、なんか【【。

134　CNNS4：】】行きたい、行きたい。

135　KNNS2：で、むしろ来年２月ぐらいに沖縄に行こうって、そのぐらい言っちゃった。

136　CNNS4：へー。

この例文では、KNNS2は沖縄へ旅行する予定について会話を進めている。CNNS4はこの発話を聞いたら、沖縄に大変な興味が湧き、KNNS2の発話がまだ終わっていないうちに、134で「行きたい、行きたい」と同じ言葉を繰り返して、強い感情と相手の発話へ共感を表している。この感情生起による割り込み発話は相手の発言権を取る言語行為ではなく、話に対する高い関心度の表出、話題を盛り上げるための働きかけとして、肯定的に捉えていいのではないだろうか。

⑤話者助け

例５のように、話し手が言葉を思い出せず、ターンを維持している途中で、聞き手がその情報を持っていれば、相手を助けるために、相手の発話に割り込む行為が見られた。このような「話者を助けるための割り込み」は両場面とも、同じ発話数でそれぞれ３話である。

例５（二人が台湾の映画について）

151　NS2：中国のあれ見た？ああ、なんだっけ？、あ、なんだっけ？

152　NS2：台湾のなんだけど。

153　CNNS2：うん、何？

154　NS2：台湾の映画で、ああ、タイトルは思い出せない。

155　CNNS2：アクションじゃない？

156　NS2：ううん、もう【[。

157　CNNS2：】]〈ラブストーリー〉｛〈｝。

158　NS2：〈ラブストーリー〉｛〉｝。

159　CNNS2：<CNNS2の笑い>やっぱり。

160　NS2：学校、学校のやつで【[。

161　CNNS2：】]あ、“那些年一起追过的女孩”（中国語）/沈黙3秒/、じゃないかなあ。

162　CNNS2：“那些年一起追过的女孩”（中国語）。

この例文では、話し手NS2が見た台湾映画のタイトルが思い出せない場合、聞き手がその情報を持っていて、積極的に相手を助ける一連の言語行動をとる姿が見られた。CNNS2はまず155で「アクションじゃない？」と相手を助けているが、NS2の「ううん」の否定的な反応に応じて、続いて157で「ラブストーリー」と割り込んで、158でNS2の

「ラブストーリー」とオーバーラップ（overlap：同時発話）になっている。このように、二人が同じ言葉「ラブストーリー」を同時発話すると、“ユニゾン”（串田，2006）[4]が生じる。このようなオーバーラップは滝浦（2008）では“共感のオーバーラップ”と呼ばれ、「協調的で共感の強い、２人で一緒に会話を作りあげるような親密な会話に現れる」（p.101）とされている。また、その後も、NS2の160「学校、学校のやつで」というヒントを受けて、CNNS2は161もう一度割り込んでこの映画の名前を言い出している。この一連の言語行動から、CNNS2は積極的に相手に協調的に会話を作りあげようとする意欲が窺える。

また、例５の談話内容を見ると、CNNSと日本語母語話が話している話題は中国台湾の映画であり、つまり、CNNS「自己の縄張り」に属する情報である。例５のような、「CNNS－NS」場面に現れた「話者助け」のための割り込み発話は合計３話である。この３話の内容はいずれもCNNS「自己の縄張り」、すなわち「自己領域」に属する情報である。一方、「CNNS－KNNS」場面では、「話者助け」の談話内容は必ずしもCNNS「自己の縄張り」に属する情報ではないのである。このことから、相手が日本語母語話者である場合、話題がCNNS「自己領域」に属する情報であるため、CNNSは積極的に相手を助けようと思って、相手の発話に割り込んだのではないか。

以上の①②③④⑤の発話内容から見れば、「①情報付加・補足」、「②質問・確認」「③共話作り」「④感情生起」「⑤話者助け」のような割り込み発話は、相手の発話権を取るわけでなく、相手の発話への興味深さや関心を示したり、相手の発話を補助したりして、相手とともに会話を構築していこうという機能があると言える。そして、①②③④のような

4 串田（2006）は、「言葉を重ね合わせる工夫によって首尾よく実現されたものとしての言葉の一致である」（p.117）を「ユニゾン」と呼ぶ。

「協調的な割り込み」の発話はいずれも第三者場面のほうが相手場面の３倍近く生起している。このことから、CNNSは、第三者のほうが相手場面より、会話に対する積極性を示したり、会話の内容を深めたりして、相手との協調関係を図ろうとする傾向が大きいことが窺える。

４．４　両場面におけるCNNSの「支配的な割り込み」

次に、「支配的な割り込み」について観察する。

本稿では、劉（2012）の一部を参考し、「支配的な割り込み」を「⑥新情報の提示」、「⑦反論」を２つに分類した。その結果が表５と図３である。

表５　両場面におけるCNNSの「支配的な割り込み」（発話数）

	⑥新情報の提示	⑦反論	合計
「CNNS-NS」場面（相手場面）	2	0	2
「CNNS-KNNS」場面（第三者場面）	10	4	14

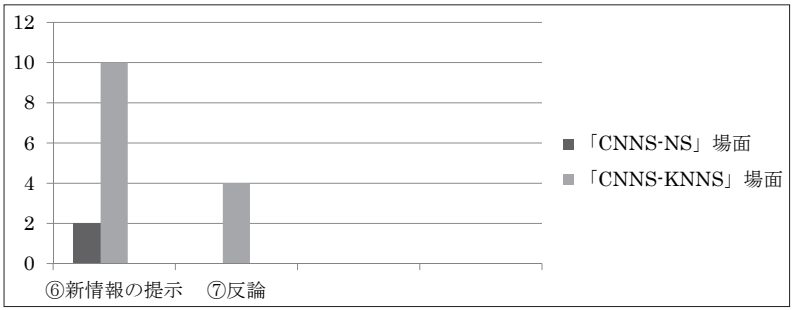

図３　両場面におけるCNNSの「支配的な割り込み」（発話数）

表５、図３を見ると、「⑥新情報の提示」は「CNNS－NS」場面では、２話であるのに対して、「CNNS-KNNS」場面では、10話であり、第三者場面のほうが相手場面の５倍である。また、「⑦反論」は「CNNS－NS」場面で見られなかったのに対し「CNNS-KNNS」場面では、４話であった。つまり、⑥と⑦のような「支配的割り込み」には相手が日本語母語話者か非母語話者かによる大きな差が見られた。以下に例文を出す。

⑥新情報の提示

話し手が話している途中で、先行話者の内容と関連性が弱いか情報、または新たな話題を提示することにより、相手の発話目的を達成する権利を奪っているものである。つまり、自己の発話を優先させるための妨害的な割り込み発話である。

例６　（中国の有名な小説である『活着』の主人公の死に方について）

330－1　NS2：なんかさ、『活着』の,,

331　CNNS2：ああ、その人。

330－2　NS2：主人公は、<u>饅頭、お医者さんがさ【【。</u>

332　CNNS2：<u>】】ああ、それは水、水のせいで。</u>

333　NS2：水のせい？

334　CNNS2：そう、饅頭食べて、そして水を飲んで（うん）、こうやって。

335　NS2：ポンポンになって。

336　CNNS2：ポンポンになって、そう、死んじゃった。

337　NS2：バカな死に方だなあ。

この例文は中国の有名な小説である『活着』の主人公の運命に関す

る会話である。その主人公は饅頭を食べ過ぎて死んでしまったのである。NS2はその主人公の死に方について説明しているが、聞き手としてのCNNS2もこの小説を読んだことがあるので、その主人公の死亡の原因について思いついた瞬間に、CNNS2はNS2の説明を最後まで聞かず、332で「ああ、それは水のせいで」という新しい情報を持ち込んで、NS2の発話を中断させている。その後、CNNS2の割り込んだ「水のせい」をめぐって、会話展開が進んでいる。このような、あえて相手の発話に割り込むものは、相手の発話内容を踏まえて新たな関連することを言うために行われる。つまり、自分の発話を優先するために相手の発話に割り込んでしまうのではないか。また、例６のような割り込み発話は荻原（2002）では、「思いつきの割り込み」として扱われたうえで、「瞬間的に割り込んだため、話し手の発話は語や句の途中で言いさしになる不自然なものが多い」（荻原2002、p.70）と指摘されており、相手の発話を妨害する言語行為と言える。

「新情報提示」のための割り込み発話は、相手場面と第三者場面においては、それぞれ２話と10話であり、第三者場面のほうが相手場面の５倍である。つまり、相手が非母語話者である場合、CNNSは自己の発話を優先するために、相手の発話に割り込む傾向が大きいことが分かる。この傾向はCNNSへのフォローアップ調査の「話し手が日本語非母語話者である場合、話したいときに随時に話し始める」という結果につながっていると考える。

⑦反論

例７に示したように、相手の話や意見に対して反論を表すために、相手の発話に割り込む言語行為である。「反論」を表す割り込み発話は、話者交替の適切な場（TRP）でないところで行われることが多いため、

話し手の発話が不自然な形で打ち切られて言いさしになっているのが特徴である。つまり、荻原（2002）が指摘したように、強力な割り込みに話し手がターンを維持できなくなったというやり取りである。

例７（ニュージーランドの友達「NNNS」について）

316　KNNS2：「NNNS」、でも、ちょっとね。

317　CNNS2：〈笑いながら〉「NNNS」ちょっと無理よね。

318　KNNS2：遠〈すぎる〉｛〈｝。

319　CNNS2：〈遠す〉｛〉｝ぎる、遠すぎるから。

（省略）

323　CNNS2：チケット高いじゃん。

324　KNNS2：うん、ニュージーランド代、高いじゃん。

325　KNNS2：ええと、でも、まあね、Facebookとかで、写真とか見てると、なんか、“えっ”【】。

326　CNNS2：【【違うよ。

327　CNNS2：本人にあいたいよ、写真だけじゃなくて。

328　KNNS2：もうやめて。

例７では、CNNS2とKNNS2は、共通のニュージーランドの友達「NNNS」をめぐって話題を展開している。ニュージーランドは韓国や中国から遠いし、チケットも高いし、会いに行くのは難しい。そのため、KNNS2は、Facebookで連絡を取ったり写真を見たりすることができるとアドバスを出しているが、CNNS2はKNNS2のその話を最後まで聞かずに、326で「違うよ」と相手の考えを否定し、327で「本人にあいたいよ、写真だけじゃなくて」と反対意見を述べている。そのため、CNNS2の割り込みによって、KNNS2の325発話が途中で中断されている。

以上の例７のような反論を表す割り込み発話は、現在話している話者の発話と重なるのを承知の上で、反論を表す別の発話を開始し、その結果、継続中の発話を途中で中止に追い込むことが多い。従って、こういう反論のための割り込み発話は、相手の発話に介入する度合いが強く、多用しすぎると、相手の発話を遮る失礼な行為とみなされがちであり、相手に不快感を与える「遮り行為」（林2008）と言えるだろう。

「反論」を表す割り込み発話は、母語話者との相手場面では見られなかったのに対し、非母語話者との第三者場面では４話である。両場面にはかなり大きな差がある。このことから、友達同士でも、相手が日本語母語話者である「相手場面」では、衝突を起こさないように、失礼にならないように、CNNSは意見の対立を避け、反論のための割り込み発話を控える傾向がある。それに対して、相手が非母語話者である「第三者場面」では、CNNSは、割り込み発話の円滑な発話の進展を妨害するというネガティブ面に対する配慮が薄れ、相手に不愉快を与えかねない反論の意見でも、明瞭に自分の意見を表現することを優先する傾向が窺える。

５．まとめ

本稿では、中国語を母語とする、日本語を母語とする上級学習者（CNNS）５名を対象とし、友人関係の相手場面と第三者場面におけるCNNSの割り込み発話を、出現頻度と機能から考察した。その結果、CNNSの機能は以下の「①情報付加・補足」、「②質問・確認」、「③共話作り」、「④感情生起」、「⑤話者助け」、⑥「新情報の提示」、⑦「反論」の７つに分類した。その中、①～⑤は会話を促進する「協調的な割り込み発話」に、⑥⑦は相手の発話を妨害する「支配的な割り込み発話」に属している。そして、これまでの接触場面に関する研究では、日本語学

習者による割り込み発話は、妨害的な「支配的な割り込み」が多いとされてきた。しかし、本研究に現れた割り込み発話の機能を分析してみると、相手の発話を妨害するような「支配的な割り込み」はさほど多くなく、「協調的な割り込み」が圧倒的に多いことが明らかになった。この結果から、CNNSによる割り込み発話は必ずしも発話権を取る妨害的なものではなく、会話のスムーズな展開のために、相手の発話に対する共感を表したり、不明瞭さをなくしたり、情報付加をしたりして、建設的で協調的な働きをしていると言えよう。

一方、割り込み発話の場面差に注目すると、相手が日本語母語話者である場合より、相手が非母語話者である場合のほうが、CNNSは相手の発話に割り込みやすい傾向が見られた。このことから、相手が非母語話者である場合、「割り込み発話」に対する不安や緊張を持たさずに積極的な会話参加に意識が傾いていることが示唆された。

また、両場面におけるCNNSの割り込み発話の機能別出現頻度を比較してみると、「協調的な割り込み」より、「支配的な割り込み」のほうに両場面の差が大きいことが明らかになった。「⑥新情報の提示」「⑦反論」の「支配的な割り込み」は相手が日本語母語話者である場合、ほとんど見られなかったのに対し、相手が日本語非母語話者である場合、頻繁に行われた。この結果から、友達同士でも、相手が日本語母語話者である「相手場面」では、衝突を起こさないように、失礼にならないように、CNNSは意見の対立を避け、反論のための割り込み発話を控える傾向がある。それに対して、相手が非母語話者である「第三者場面」では、CNNSは、割り込み発話の妨害的な側面への配慮が薄れ、相手に不愉快を与えかねない反論の意見でも、明瞭に自分の意見を表現することを優先する傾向が窺える。

これらのことから、CNNSは、相手が日本語非母語話者である場合、

「割り込み発話」に対する不安や緊張を持たさずに発話自体に意識が向けられるのに対し、相手が日本語母語話者である場合、母語話者を意識し、「割り込み発話」への配慮を持ちながら、妨害的な割り込み発話の使用を控えることによって、問題や衝突を起こさない、会話を壊さないよう気をつかうという言語外的要因が存在すると考えられる。

これまでは、母語話者との接触場面における学習者の日本語を「中間言語」と考えるのが一般的であり、話し相手が母語話者か非母語話者かという言語外的要因については等閑視されてきたと言える。中国語を母語とする上級学習者の割り込み発話に関する本調査結果においては、非母語話者との第三者場面と母語話者との相手場面では、異なる「中間言語」の局面が窺えたことから、学習者の言語習得に「話し相手の母語」という言語外的要因が及ぼす影響は決して小さくないと考える。

＜参考文献＞

赤羽優子（2014）「日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節」『計量国語学』29（５），pp.131-153

宇佐美まゆみ（2006）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）2005年２月25日改訂版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』言語情報学研究報告13，東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」pp.21-46

荻原稚佳子（2002）「日本語インタビューにおける「言いさし－割り込み」の連鎖―対人コミュニケーションの視点から―」『異文化コミュニケーション研究』14，神田外語大学，pp.57-77

串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共－成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社

木暮律子（2002）「話者交替における発話の重なり―母語場面と接触場面の会話について―」『日本語科学』11，pp.115-134

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

陳新、川口良（2012）「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」『言語と文化』25，文教大学，pp.70-100

陳文敏（2004）「台湾人上級日本語学習者の初対面接触場面会話におけるスピーチレベル・シフト―日本語母語話者同士による会話との比較―」『日本語教育論集』20，国立国語研究所，pp.18-33

長谷川紀子（2005）「日本語学習者の割り込み発話」『千葉大学日本文化論叢』６, 千葉大学文学部日本文化学会，pp.105-90

林宅男（2008）『談話分析のアプローチ：理論と実践』研究社

ファン，S．K．（2006）「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」『日本語教育の新たな文脈―学習環境，接触場面，コミュニケーションの多様性―』，独立行政法人国立国語研究所編，株式会社アルク，pp.120-137

藤井桂子（1995）「発話の重なりについて：分類の試み」『言語文化と日本語教育』10，pp.13-23

本田明子（2016）「第15章自然談話に見られる重なりの諸相―親しい関係の日常談話から―」『談話資料 日常生活のことば』現代日本語研究会編，ひつじ書房，pp.295-308

劉佳珺（2011）「会話における割り込み発話についての考察―日本語母語場面と中国語母語場面の対照研究」『小出記念日本語教育研究会論文集』19，pp.39-55

劉佳珺（2012）「会話における割り込みについての分析：日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特徴」『異文化コミュニケー

ション研究』24，神田外語大学異文化コミュニケーション研究所，pp.1-24

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版

水谷信子（1995）「日本人とディベート―共話と対話」『日本語学』14（６），明治書院，pp.120-137

三牧陽子（2015）「言いさしに見るポライトネス」『日本語学』34（７），明治書院，pp.26-36

李舜炯（2016）「韓国人日本語学習者の習得レベル別にみた「共話的反応の型」の使用実態」『2016年度日本語教育学会春季大会予稿集』，日本語教育学会，pp.201－206

Sacks, H, Schegloff, E. A., & Jefferson, G.（1974）. “A Simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation”. *Language*, 50（４）, 696-735.